神奈川県皮膚科医会第121回・創立40周年
記念例会・祝賀会

神奈川県皮膚科医会　第121回例会・通常総会
横浜市皮膚科医会　第114回例会

日時：2006年7月2日（日）14:00～

会場：ホテルニューグランド

プログラム

＜例会＞

1. 記念講演「皮膚科医45年―患者と先人と仲間との出会い」
   講師：井上勝平
   （宮崎大学医学部皮膚科名誉教授・長野県飯田市）
2. 「Let's enjoy皮膚科専門医試験」
   ナビゲーター：木花　光、増田智栄子
   高須　博、金丸哲山
3. 幕間演奏「The Surfside Stomp」（松井　潔）

＜祝賀懇親会＞

1. 会長挨拶
2. 来賓紹介・代表者祝辞
3. 乾杯
4. ステージ演奏「JIMPI BAND」「The Surfside Stomp」
5. 次期役員紹介

感謝

菅原　信
神奈川県皮膚科医会前会長

平成17年６月にけいゆう病院を定年となり、その後も部長職として勤務を続けていたものの、今一つすっきりしない毎日を過ごしていました。

大学を卒業して35年、大学病院とけいゆう病院に勤務医として勤め上げ、傍からみればかなり恵まれた人生を送ってきたようでもあり、日本臨床皮膚科医会では副会長と南関東山静支部長を務めさせて頂き、神奈川県皮膚科医会の会長も３年半に亘って務めさせて頂くなど、身に余る役職を経験させて頂き、文句を言っては罰が当たる人生であったかも知れません。

しかしこれらはあくまでけいゆう病院皮膚科部長であったからこそ廻ってきたものであり、菅原個人の能力によるものでないことは明らかです。定年を機に如何に会員の皆様にご迷惑をお掛けせずに役職を退くことができるかを考えました。

日本臨床皮膚科医会副会長退任の件については、いずれお話しする機会があるかも知れませんが、結論として続けることが出来なくなり、監事を拝命するに至りました。創立３年目から常任理事を務め、20年間役員を続けて参りましたので、やはり引き時であったのだろうと思っています。

日本臨床皮膚科医会南関東山静支部長については、もともと副会長と支部長を兼任することが、前例はあるとはいえ、あまり好ましいことでないことは承知しておりましたので、よい機会であると思い、神奈川県皮膚科医会の主だった役員の先生に相談させて頂き、日頃から総務担当として大変にご尽力して頂いていた金丸哲山先生にお引き受け頂くことができました。

さて、神奈川県皮膚科医会会長のことですが、皆様よくご存知の通り、原紀道前会長の急逝に伴い、当時副会長であった滝沢清宏先生にご就任頂くべきところでしたが、体調が思わしくないとのことで、サブの副会長であった私に大任が廻ってきました。500名からの会員を率いるのは並大抵のことではなく、幹事長未経験の私では心もとないことこの上ない状況でしたが、多くの先生方のサポートを得て、他にも適任の先生がいらっしゃったにも拘らず会長をお引き受けすることになりました。原前会長のお考えを踏襲し、精神的にはあくまで副会長として代理の積もりで続けて参りました。幸い常任幹事や幹事の先生方をはじめ多くの有能なスタッフに恵まれ、恙なく務めさせて頂きました。２期目からはさらに強力な幹事長を得て、やや曖昧な部分の是正に取り組み、かなりすっきりとした人事体制を確立できたのではないかと考えております。

平成18年７月２日、神奈川県皮膚科医会創立40周年記念例会並びに祝賀会が挙行されました。井上勝平先生のご講演、専門医試験から抜粋した問題のテスト、会員で結成されたJIMPI BAND等々、本当に楽しい１日でした。会長退任に際して素晴らしい花道を敷いて頂いたと思っております。実行委員長の栗原先生を始め会員の皆様に深く感謝しております。有り難うございました。

栗原誠一新会長は行動力を備えた先生であり、神奈川県皮膚科医会は今後ますます発展して行くものと確信しております。会員の先生方には是非一緒に会を支えて頂きたいと思います。私も顧問という立場ではありますが、必要な時にはお役に立ちたいと考えております。

神奈川県皮膚科医会40周年によせて

加藤友衛
日本臨床皮膚科医会会長

神奈川県皮膚科医会が創立40周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

昭和35年にはじまった「神奈川県皮膚科懇談会」が発展し、昭和41年に「神奈川県皮膚科医会」として発足されたと伺っております。40年の長きに亘って、年３回、時宜に適ったテーマで生涯教育のための例会を県内各地で開催してこられました。また、委員会活動では、いち早く在宅医療委員会、学校保健委員会、産業医委員会、IT委員会などを設けられ、活動しておられます。在宅医療委員会では、パラメディカルの人たちと一緒に勉強会を開催するなど、着実な歩みを続けておられます。また、平成16年度から、文部科学省から各都道府県教育委員会に委嘱され、展開されております学校医の専門相談医制度。これは、今までの内科、眼科、耳鼻科の３科だけでは現状に対応しきれなくなってきているところから、精神科、産婦人科、整形外科、皮膚科の４科が、学校からの要請に基づき健康教育などを行う事業です。これは、平成６年頃から、ご当地、神奈川県ではじまった「神奈川方式」が母体になっていると言われております。健保委員会では、診療報酬改定のたび毎に説明会を開かれ、また、社保・国保審査委員懇談会の開催など、全国各地のお手本になっております。なかでもユニークなのは、会員が診療できなくなるというような不測の事態に対し、お互いに助け合う「会員診療互助システム」が用意されていることでしょう。

現在の医療保険制度では、保険医の登録、医療機関の開設、医療法人の認可、指導・監査、診療報酬請求明細書の審査などすべてが都道府県単位になっております。県医師会の各種委員会へ皮膚科医の代表を送り込む必要もあります。このような状況下での都道府県レベルの医会の存在意義を考えますと、生涯学習が大切なことは言うまでも無いことですが、保険情報の交換、さらには、審査委員の推薦など皮膚科としてのなすべき重要な役割が多々あります。

翻って、日臨皮の支部を見てみますと、残念ながら都道府県単位にはなっておりません。これは日臨皮の弱みでもあります。しかし、「皮膚の日」事業、学校保健活動なども現実的には都道府県単位で行われております。他の医会の支部は、法人化している医会では全て都道府県単位の支部になっております。都道府県単位の皮膚科医会が日臨皮の支部になることができれば、日臨皮にさらに力が付いてくるものと思われます。このことに関しましては、現在、支部組織検討委員会で検討して頂いているところです。

また、2003年３月28日に閣議決定された医療制度改革の「基本方針」のひとつに、「公的医療保険を運営する保険者を都道府県単位にする」というのがあります。現在、都道府県内には市町村単位の国保、会社ごとの組合健保、政管健保など沢山の小さな保険者に分かれておりますが、これが、国保、組合、政管の３つくらいに集約され強大な保険者が誕生し保険者機能を発揮することになります。都道府県単位で医療費の適正化を図ることになり、さらには、都道府県単位で保険料・診療報酬を決めるようにするという案です。そうなりますと、都道府県医師会、ひいては、都道府県単位の医会が、現在より更に重要な役割を担うようになることは自明の理でありましょう。

神奈川県皮膚科医会が創立40周年をひとつの契機として、今後さらに発展を遂げられますことを願っております。

最後になりましたが、会員の皆様のご健勝と今後のご活躍をお祈りいたしまして祝辞といたします。

原紀道先生そして神奈川県皮膚科医会

服部　瑛
はっとり皮膚科医院（群馬県高崎市）

世の中に“師”と呼ぶべき人は多い。考えてみれば一期一会の出会いにも学びがあり、まして専門の皮膚科領域では、得難く、貴重なことを教えてくださる先生は数知れない。実にありがたいことだと思っている。

その得難い“師”のお一人、原紀道先生が鬼籍に入られた。思いがけない訃報にしばし慟哭すると同時に、感謝の念が心を満たす。

原先生との関わりは、実は始まったばかりであった。昨秋、ある依頼原稿を書くべく準備を進めていたところ、先生が著された論文に出会った。不躾ではあったが、お目にかかって直接教えていただきたいと思ったので、その由、手紙にしたためた。ほどなく返事をいただき、私の要望は快諾された。

平成13年12月14日、私は原先生がお住まいになる鎌倉市に向かった。晩秋のなごり漂う師走の一日であった。鎌倉駅に着き、駅内で美味そうな匂いにつられてラーメンを食べた。約束の時間にはまだ十分余裕があった。

鎌倉は、今なお歴史の息吹を感じさせる街だ。この年放映されていたＮＨＫの大河ドラマ「北条時宗」をおもしろく観ていたため、多少の親近感がある。駅から５分ほど、先生のお宅までの道をゆっくり歩いた。

白を基調とし、意識的に緑色を配した洋館風な医院は、なぜだか、お目にかかる前から先生の清々しいお人柄を想わせた。そしてそれはまったく裏切られることはなかった。やさしい笑顔で迎えてくれた先生。私といえば、間の悪いことに駅で食べたラーメンのあおりで汗だくとなっていた。ハンカチで顔をふき、非礼を詫びながらの初対面だった。先生は、千葉大昭和38年卒の、神奈川県皮膚科医会の重鎮。私の質問の前に、最近、癌の手術をされたばかりだと告白された。

迂闊だった。そうと知っていれば、先生にこんな負担をかけずに手紙で済ますこともできたはずだ。私の額から、さらなる汗がにじみ出し、頬を伝わるのが分かった。しかし先生は、静かに、ゆったりと質問に答えてくださり、あまつさえ、先生ご自身の抱負を語ってくださった。２時間があっという間に過ぎた。私にはこれ以上ないほど有意義な時間であったが、先生にとってはどうだったろうか。まだ体調が万全ではないはずの先生がそれでも“やさしい笑顔”を崩さず、終始された。有難いことであった。

厚かましくも辞する時、写真を一緒に撮らせていただいた。快く応じてくださった１枚の写真。これが先生と私との最後の記念写真となるとは……。

帰りは、せっかく来たのだからと思い、鶴岡八幡宮から源頼朝の墓の辺りを散策した。木々の紅葉がわずかに残り、師走であることを忘れさせるぬくもりと静けさ……、心穏やかに鎌倉を後にした。

その後、先生から“主張”や“随筆”などが送られてきた。なんとやさしい心くばりだろう。うれしく、興味深く読ませていただいたのは言うまでもない。

偶然、ご逝去を知ったのは平成14年の７月はじめ。まさかと目を疑った。つい半年前にお目にかかった時の、お元気そうな様子からは到底信じられないことだった。あの日の情景が、先生の“やさしい笑顔”が、走馬灯のように脳裏を去来した。

お目にかかって以後の、皮膚科医としての力量ばかりか、人間的な先生の素晴らしさを知れば知るほど、この度の訃報は残念でならない。宿命とはいえ、人間の死の重さは計り知れない。わずかな時間だったとはいえ、私は原紀道先生と直接お会いできたことを、私の人生のよすがとしたい。いまだに心に立ったさざ波は静まることを知らないが、ご冥福を心より祈るばかりである。

合掌しつつ……。

これは『医家芸術』の平成14年10月号に収めたものです。早いものでもう５年になります。原先生のお蔭で、その時から神奈川県皮膚科医会とのお付き合いが始まりました。天上から原先生も神奈川県皮膚科医会のご発展を笑顔で見守ってくださっているにちがいありません。あえて『神皮』創立40周年記念号に原紀道先生のお名前を出した所以です。

神奈川県皮膚科医会は会員数が多くて質が高く、また日本を代表する皮膚科医会の一つです。一方、群馬の実地皮膚科医会は小さく、実力もまだまだです。

神奈川県と群馬県はずいぶん遠いようですが、ＪＲ湘南新宿ラインで高崎市と連結していることもあって意外にも近いのです（もちろん新幹線を利用するとは思いますが）。ふと神奈川県と群馬県との「湘南新宿ライン合同皮膚科医会」ができないかなどと夢のようなことを思いました。

群馬には数多くの温泉やゴルフ場があり、避暑地として有名な軽井沢にも近いのですが、食事はおおむね落第。神奈川県は大都会でおいしいところがたくさんあります。それぞれ個性ある地域で、２年か３年に１回ほど、交互に小さな“皮膚科医の集い”ができたら楽しいだろうな、などと勝手に夢想しているところです。

このたび、神奈川県皮膚科医会40周年おめでとうございます。これからもますますのご発展を心より祈っております。

※顔写真は平成17年６月の第21回日臨皮学会のときのもの。中野政男先生よりご恵贈いただきました。

神皮の心地良さ:神皮・関西支部長(自称)から観て

幸野　健
関西労災病院皮膚科部長（兵庫県尼崎市）

「神皮」の響き

「神皮」という語感が好きです。“God's skin”とは、なんと神秘的で甚深微妙な響きでしょうか。「外界とのインターフェースとなり、人をかばい育てる皮膚」、「感受性の最先端たる皮膚」、「美しく表情のある皮膚」など、様々な瞑想的イメージをもたらしてくれるからです。

なぜ関西支部長（自称）となったか？

神皮の会で時々、チョビヒゲを生やした大阪弁を喋るヘンなオッサンを見かけられると思います。「どうして此処に居るの？」とお思いでしょう。

数年前、『皮膚病診療』の「声」欄での栗原誠一先生との応答がご縁となり、その後、神皮の先生方と楽しく過ごさせて頂く機会が増えました（楽し過ぎて、金丸哲山先生ご夫妻ご逗留のホテルに押しかけて深夜宴会を開かせて頂いたのは悪乗りでした。すみませんでした）。

ある飲み会の折、菅原信前会長より「幸野君も神皮に入りな」という鶴の一声がありました。「（横浜の名歌「赤い靴」の節で）♪黒いヒゲ生やしてたヘンなオジサン、会長さんに連れられて入っちゃった♪」という次第です。

医会は単なる労働組合ではない

話は変わります。内科開業医の亡父は医師会活動に熱心でしたが、晩年は「今の医師会は労組みたいになってしまった。何よりもまず品格のある学術団体でなければ」と不満を漏らしておりました。

私の医会観：友愛会（fraternity）

私は医師会、そしてその分科会たる「医会」を単なる学術団体におさめてはならないと考えています（日本医学会や日皮会がありますので）。それ以上であるべきです。

欧米には「クラブ」など、ゆかしい“brotherhood

（兄弟姉妹会）”の伝統があります。その中では、フランス革命の標語になった精神、すなわち、自由（liberty）・平等（equality）・友愛（fraternity。博愛は誤訳。「友と呼ぶに値する者を愛する」の意）に満ちたひと時を過ごせるとされます。その意味から“fraternity（友愛会）”とも呼ばれます。

医会も、単なる職能団体ではなく、悩みも喜びも分かち合え、元気が与えられ、共に成長して行ける「友frater」の集いでなければと思っています。それでこそ結束力も生まれ社会の尊敬も得られるでしょう。

母校より母会

また、昨今は「母校alma mater（materは母の意）」という概念が空洞化しています。大学医局への入局者が全国化し、「学風」を強調される教授連も少なくなっており、慢性的マンパワー不足から勤務医に対する大学の統率力が低下しているからです。若い医師に単なる医療技術を超えた「医人・国手としての精神」を育む場がなくなりつつあるのです。若手の先生方のために、各地の医会が「より実際的な皮膚科医としての生き方のすべ」を教えてくれる場になって欲しいと願っています。「母校より母会」の時代の到来です。

その眼で神皮を観ると

昨年の神皮・創立40周年記念会に参加させて頂きました。由緒あるクラシカルなホテルニューグランドのムードはまさに神皮に相応しいものでした。そして、実に記念会に神皮の特徴が結晶していたと感じました。以下、私なりの感想を述べます（キャッチコピー風ですが、私の頭脳構造がそうなっているのでご容赦下さい）。

・「キリリとした構成力と企画力」
・「キラリと光るウィットとユーモア」
・「ピタリとはまる適材適所の人材力」
・「バッチリ決まるイベント力」
（イベントをうまくできるのは「力」です）
・「それでいてメローでタイトな社交力」
（単に社交「性」ではなく「力」と表現したいと思います）

母なる海の傍のお洒落なホテルでの友愛（fraternity）に満ちたひと時……本当に楽しい心地良い夕べでした。この時の感覚が今も舞い戻って来て時折思いに耽る今日この頃です。

栗原会長が「どんどん友達を作っていく」という所信を述べられましたが、神皮の伝統が各地の医会に伝播し、神皮が「医会精神の母会」になってくれることを心から期待しています。

以上の意味から、私は関西における神皮のシークレット・エージェントなのです（シークレットの割には目立ち過ぎるかも）。

あやふやな記憶のあれこれ

花岡宏和
花岡皮膚科クリニック（横浜市中区）

会の創生期の大森周三郎、野口義圀、戸澤孝諸先生の時代はよく存じません。野口教授が鼓を打ち乍ら、貫禄はいまひとつだがこれからは有能な若い中野政男、安西喬君に任せる、と言われたようなことをもれうかがったような曖昧な記憶があります。

その後十数年間は万事御二方の差配に従って、会は心地良い成長の時代が続きました。お二人は実に相身互いに補完し合って、全てを滑らかに動かし、着実に会を育て大きくしていかれました。学閥もうまれず、勤務医も開業医も等しくかかえ込んで融合した団体として発展してきました。これは実にすばらしいことで、我が会が声を大にして誇りとするところです。その過程は勿論民主的手法から外れたものではありませんが、何といってもあり余る程の貫

禄をつけたお二人の優れた指導力により、皆が何の不平もなく進んで従っていって、極々自然にできあがっていった体制と感じております。それは欧米白人のリードする団体によくみられる良い意味の「サロン」的匂いに包まれた心地良さがありました。

その間、安西先生は念願であった日臨皮を立ちあげ、日皮と異なる役割を掲げ、日本の皮膚科界の一方の旗頭となりました。中野先生も会頭をつとめ、神奈川県皮膚科医会を全国に知らしめました。

一方で六六会というゴルフの会を年６回開催を続けているのも会の親睦の大切な色付けに役立っています。

この平和な会が突然不意打ちを食らいました。昭和50年頃、事務委託した県医師会の担当者による会計使い込み事件です。当時私は会計担当の立場にあり、自分の愚鈍さを悔やんでも悔やみきれず、皆様に合わせる顔がありませんでした。この誌面をおかりして、伏してお詫び申し上げます。幸い安西先生の素早い御賢明な処理で救われました。今でも感謝この上もありません。

でも時代が進み会員も倍増し、関係諸団体なども現れ、今迄より公的役割も求められるようになり、会も脱皮が必要になった頃、長年サロンを実務的に独りで強力に支えていた加藤安彦幹事長の必然的で納得させるクーデターにより無血革命が起こりました。その後数年間の加藤体制で、会は着実に安定した成長をゆっくりと遂げていきました。会の内の各種係も徐々に活動を増し、会の足腰が強くなっていきました。

2000年に原紀道先生が禅譲的に会長となるや、長年貯えた会への情熱と会の理想像を実現すべく、各係、幹事達の活動を促し、会長の下で手足がよく動く会に急変していきました。選ばれた若い幹事達も生き生きと活動を楽しんでするようになり、原先生の卓見を証明すると共に会はまたひとつ現代的に成長したと感じました。惜むらくは病魔での挫折で、もうしばらく思う存分腕を揮ってくれたらと本当に残念でなりません。

鎌倉八幡での原先生を偲ぶ会は実に印象深い集まりで、サロンから引き継がれたこの会の長所がみえた思いです。これを計画実行した菅原信内閣は短命でしたが、忘れてはならないのは、この会が密かに誇る盤石の会計基盤を長年にわたり築きあげた加藤・菅原両先生の努力に感謝しなくてはなりません。

近年は皮膚科入局者は女性が多数を占め、美容皮膚科面の開拓が著しく、医師会への不加入や保険診療の諸問題、巨大資本の医療への参入、若者への会への勧誘など問題山積しています。変革が早く忙しい時代ですが、若い栗原誠一新会長を囲む多士済々の諸先生の舵取りに何ら不安はありません。結局、“人は城”ということで、今迄にしても、お名前を出せない程数多くの有能な先生方の存在があって始めて今日がある訳です。会の向後を楽しみに期待しています。

あやふやな記憶と勝手な思い入れとぞんざいな文で誌面を汚したことをお詫び致します。

40周年を祝して

村上通敏
横浜市皮膚科医会会長

此度、神奈川県皮膚科医会が創立40周年を迎えられたこと、横浜市皮膚科医会を代表して、心よりお祝いを申し上げます。

この大きな成果は、会の創立発展を支えられました多くの会員、役員の努力の賜物であります。

昭和41年の創立以来、一貫して県皮膚科医会の向上に、極めて大きな役割を果たしてこられたことに対して、心から敬意を表します。

横浜市皮膚科医会々員の殆どが県皮膚科医会々員であり、また、年３回の例会のうち１回の共催をいたして、文字通り密接不可分の関係であり、これからもより良い発展を期して、相互理解が大切であります。

神奈川県皮膚科医会では、各分科会が大変に独創的な企画で活発に活動されております。バランスのとれた活動は内外を問わず、絶賛の的であります。

また、毎回の例会の企画が、会員の魅力となっており、優れた講演と相俟って、会の優れた特徴であります。

「勇将の下に弱卒なし」の言葉通り、40周年を迎えて、栗原誠一会長のもと、会員一致団結して、これからの将来を益々充実したものにして行きたいと思います。

最後に、神奈川県皮膚科医会のさらなる発展を祈念します。

皮膚科医45年―患者と先人と仲間との出会い―

井上勝平
宮崎大学医学部皮膚科名誉教授
長野県飯田市

皮膚科医の道を歩き始めて45年になる。忘れがたい患者―心に串が刺さっている人―との出会いを経糸、先人と仲間から学んだことを緯糸にした体験談―その多くは失敗談―を語った。

ゲーテは「気のきいたことはすでに言い古されているが、くり返し言わねばならない」、「先人の肩の上に立て、そうすればもっと遠く広く見わたすことができる」と述べているので、老生も心に刻印されている言葉（logos）のいくつかを症例と共に提示した。

川村太郎先生：母斑・母斑症研究の推進力は常に成因に関心をもつ臨床医（etiologically minded physician）の観察力と分析力と洞察力にある。

船橋俊行先生：三下奴になるな。皮膚病診療では舌（口内病変）、しも（外陰などの全身）、下（皮疹の下床）の３つに留意しないと三下奴になりさがる。

老生の自戒：くすりはtoxicon〈矢→toxicology（毒物学）〉であり、pharmakon〈ほれ薬→pharmacology（薬理学）〉である。薬を処方することは医者の業（わざ）であるが業（ごう）でもある。

緒方克己宮崎大助教授：初診は初心に、再診は細心に。

安田利顕先生：夢をもて。

木下利玄：牡丹花は　咲き定まりて　静かなり　花の占めたる　位置の確かさ

上田三四二：散る花は　数かぎりなし　ことごとく　光をさして　谷にいくかも

Tennyson：I am a part of all that I met. 私は、私が今日まで出会ったすべてのものの一部である（日野原重明先生訳）。

森繁久彌：経師は遇い易く人師は遭い難し。

中野孝次元神奈川近代文学館館長：人は人生を長く生き、みずから沢山のことを経験しなければならない。

細川宏先生：Patients must be patient.（病者とは耐え忍ぶ者の謂である）。

「Let’s enjoy皮膚科専門医試験」を担当して

木花　光
済生会横浜市南部病院

当医会の40周年記念例会に何をやるかは、幹事会でもなかなか決まらずでしたが、井上勝平先生の御講演がいいのではという栗原誠一幹事長（当時）の提案が、満場一致で採択されました。井上先生に

は当日、深い感銘を与える御話をしていただいたのは皆様御承知の通りです。

記念例会のもう１つの出し物は、さらに難産でした。40周年であるからには、さすが神奈川県皮膚科医会だといわれるものをと考えるのですが、学会がこんなに多い御時世で、どこもやっていない斬新なすばらしい企画がころがっているわけがありません。ところが、これもまた栗原先生が「皮膚科専門医の試験を皆で解いてみたらどうだろう」と発案されました。これはどこの学会でも取り上げられていないようであるし、日皮会誌に出ている問題をチラチラと見て、難しいと解くのをすぐにやめられた先生も多いでしょうし、おもしろいのではということになりました。

テーマが決まれば、実行委員の人選です。こういう時は、幹事長と目が合うといけません。顔を伏せておくに限ります。オシッコに行ってもいけません。欠席裁判で委員に決まってしまいます。ひたすら顔を上げないようにしていましたが、栗原先生の鋭い視線が机の上で反射して私の目に入ってしまったのか、実行委員にされてしまいました。ははあ、ありがたき幸せ。以前にもこんなことを書きました。

増田智栄子、金丸哲山、高須博の各先生も実行委員に指名され、私と増田先生が問題の選択、高須先生は解答と解説、金丸先生は司会と分担しました。

私は基礎関係の問題を選ぶことになり、日皮会が発行している過去の問題集を買って、1992年の第１回から昨年までの問題を全て見てみました。最初の頃はやさしかったのですが、年を追うごとに難しくなっており、試験対策をしないと落ちるだろうと思いました。ただし、類似の問題も２～３年毎に出題されており、過去の問題をやっておけば、何とかなりそうです。出題者の趣味の分野の、これは専門医として覚えておくほどのことかなという問題もありますが、全体では出題範囲は基礎から臨床はいうに及ばず、法律から薬価まで多岐にわたり、なかなかいい試験問題だと感じました。これなら例会も楽しめるものになるだろうと確信しつつ、問題を選びました。高須先生のパソコンによる美しい解説もあり、懇親会での評判も良かったようです。

PS：本企画はそのユニークさで、「皮膚病診療」誌に取り上げられることになり、例会の後で実行委員４人で座談会をしました。同誌の2007年１月号に掲載されました。そちらもぜひ御一読ください。

PPS：私事で恐縮ですが、私、本誌編集の委員長を先号で退任しました。４号より委員に加わり、８号にて委員長としてワニを抱いて鮮烈にデビューし、通算10年本誌に関わりました。皆様より楽しい玉稿を多数いただいたおかげで、皆様に愛読され、広告も集まり、数年前より黒字で発刊できるようになりました。皆様、ありがとうございました。川口博史新委員長のもと、本誌のさらなる発展を祈ります。

デキシーは楽しい

松井　潔
松井ヒフ科医院（藤沢市）

昼間は堅気のサラリーマン。しかし、宵闇迫るとどこからともなく某所に集まり、ご機嫌なデキシーランドジャズを奏でるアマチュア音楽集団。慶應義塾大学デキシーランド・ジャズ・クラブのOBに湘南のミュージシャンが加わって構成されたジャズユニット。

それが、「The Surfside Stomp」。40周年記念祝賀会に参加させていただき、一同大いに盛り上がりました。

ありがとうございました。会員の皆様も楽しんで頂けましたでしょうか？

とにかく「音を楽しむ」の字のごとく、「飲めや歌えや」で、楽しく演奏するのが大好きな連中ばかりで、少々音をはずそうが、テンポが乱れようが、

お構いなしに突き進んでおります。特に私が……。

ジャズと言うとなんとなく堅苦しく思われる方もおられると思いますが、実際は町内会の盆踊りのように、集まった人たちが、好き放題に音楽を奏でていったものが、なんとなく形をなして、その後確立されていったもののようです。

特にThe Surfside Stompが主に演奏しているデキシーランドジャズはジャズの原点で、アメリカ南部のニューオリンズを中心に、なんとなく出来上がっていった音楽です。酒場に置いてあったピアノは当然、調律なんかしていません。そのピアノを、使用人だった黒人奴隷が適当に弾いたり、その辺の空き缶や洗濯板を打楽器にして（これは今でも「ウォッシュボード」まさに洗濯板としてデキシーランドジャズにかかせない正式な楽器になっております）演奏をしたりしていたようです。ピアノは高音弦は３本で低音弦は２本、もしくは１本なのですがそのうち１本がやや低くなると音は微妙に狂って、それが独特のホンキートンクと呼ばれるジャズのスタイルになっていったのです。ただこのようなことは、クラッシク音楽でもバイオリン、あるいはその他の弦楽器や合唱団で、複数の音の微妙なズレが、オーケストラあるいは、音楽そのものの厚みを増す要因になっております。

少人数で演奏するジャズにはあまり取り決めがなくコード進行と主なメロディーだけが与えられて、あとは適当に演奏していく場合が多いようです。最も、ブラスバンドで演奏されるジャズはきっちり決められており、譜面どおりに演奏されます。ただ正確な音楽も大事ですが、ちょっといい加減な音楽も案外面白いものです。

デキシーランドの曲にお葬式３部作と呼ばれる３曲があります。

１曲目は「Free As A Bird」。

死ぬことで鳥のように自由になれる、死が唯一黒人奴隷が解放される時という悲しい事実を、素晴らしいメロディーに乗せています。２曲目は「Just A Closer Walk With Thee」、邦題「いざ行かん主の御許へ」。そして有名な「When The Saints Go Marchin'In」、邦題「聖者の行進」はお葬式３部作の最後の曲として、死者が天に昇ってその後、葬式に参加したみんなが死者を聖者として町に再び迎えいれるという趣旨の曲で、このような明るい曲にもせつない音楽の原点があるようです。

我々The Surfside Stompのジャズは、先ほども述べた様に、雰囲気でアドリブ演奏をする、という醍醐味があります。その時の気分で「いいフレーズ」がでることもあれば、どうしようもない「しょぼいフレーズ」しかでないこともあります。でも、目を合わせながら、みんなで音楽を作っていくのは至福のときでもあり、やめられません。

音楽はまさに楽しい――。

オペラユニット「ティラミス」とのジョイントコンサートにて